

国語科教育法 （教育コース 2年：前期）

ティーチング・ポートフォリオ

佐賀女子短期大学 こども未来学科 教授 脇山 英靖

1. 教育の責任

こども教育コースの特色は、小学校教諭二種免許、幼稚園教諭二種免許、保育士の三免許取得である。三免許取得は、就職の幅が広げ、学生のキャリアアップに繋がる。将来設計に合わせた「強み」を手にすることができる。なかでも、小学校教諭二種免許の取得は、最速2年で小学校の教壇に立つことを可能にする。

佐賀県小学校教員採用試験の倍率は、令和3年度（1.4倍）、令和4年度（1.4倍）、令和5年度（1.3倍）、令和6年度（1.1倍）、令和7年度（1.3倍）、秋採用試験を含めた場合1.6倍であり、低迷している。令和元年度、本学の小学校教員採用試験、現役合格者は1名にとどまり、短大の「強み」を生かしきれていなかった。この状況を改善するため、令和2年度より、佐賀県教育委員会と連携し、現役小学校教頭を准教授として招聘し、教員養成、採用試験合格者増につなげる取り組みを始めた。令和7年度、本学学生の小学校教員採用試験合格者は7名（10名受験）であり、合格率は70.0%である。1名は、秋採用試験合格者である。小学校教員を目指す学生の進路を保障する（結果を保証する）ことは、喫緊の課題である。

本科目は、「専門教育科目」として位置づけられている。①小学校国語科における国語教育の意義、育成を目指す資質・能力について理解する。②学習指導要領に示された指導事項について、基本的知識の習得をはかる。③模擬授業や教材分析など、演習を通して、効果的な指導方法や指導技術を身につける（教材のユースウェア、観点を習得・活用させる指導、ノートによる個別評定、黒板の効果的な使用法、導入のつかみ、授業のリズムとテンポ、明確な発問・指示等）。小学校教材をもとにした教材分析や発問・指示の出し方、授業展開の方法について演習形式で授業を進め、児童の「わかる」「できる」を保証する指導技術を磨くことに重きを置く。

このことは、本学科の学修成果「将来の小学校教諭・幼稚園教諭・保育士等としての目的意識を持ち、使命感と豊かな人間性を備えた人」、「基礎・基本の学力とともに、専門的知識や実践的技能を身につけようと努力する人」と関連している。本科目では、教育者としての資質能力の素地作り（汎用的な学修成果）はもとより、教育現場で即戦力となる人材、小・幼・保連携の中核として活躍する人材育成に主眼を置く。

2. 教育の理念

本科目では、以下の8つをねらう。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">①学習指導要領における国語科の目標及び指導事項、全体構造について理解することができる。②指導上の留意点を理解し、板書、ノート指導、発問・指示など、一定の指導技術を身につけることができる。③学習評価の仕方について、理解することができる。④身につけた教材分析の方法を他の教材研究に活用することができる。 |
|--|

- ⑤資質・能力を効果的に身につけさせる授業を設計し、指導方法を理解することができる。
- ⑥ ICT を活用した授業方法について、理解することができる。
- ⑦学習指導案の構成を理解し、授業を想定した学習指導案を作成することができる。
- ⑧模擬授業の実施と振り返りを通して、授業改善の視点を身につけることができる。

小学校における教員経験（30 年間）を生かし、「現場で役立つ」指導方法や指導技術を学生に身につけさせる。実物資料、事例研究、模擬授業など、魅力ある課題を提示し、常に自分事として学生に捉えさせる。授業目標に到達させるため、本授業では以下の3つに重きを置く。

- 〈1〉対話や話し合い活動を積極的に取り入れ、常にアウトプットすることを学生に求める。
- 〈2〉学生の発言（思考力・判断力・表現力）を授業内容に関連させ、展開することを通して、「主体的で対話的で深い学び」の実現（授業のアクティブラーニング化）を図る。
- 〈3〉毎回、授業ノートの提出を学生に求め、コメント、評価を行い、フィードバックすることを通して、学生に学びの有用感を持たせる。

3. 教育の方法

■授業内容・方法

「1. 教育の責任」「2. 教育の理念」を受け、授業では以下の内容・方法で進める。

- ・国語教育の意義と目標
- ・国語科教育の現状と指導方法
- ・児童の実態把握と単元計画、年間指導計画
- ・物語教材における教材分析と指導方法
- ・説明的文章における教材分析と指導方法
- ・音読教材における教材分析と指導方法（話す・聞く）
- ・詩教材における教材分析と指導方法
- ・俳句・短歌・古典教材における教材分析と指導方法（伝統的な言語文化）
- ・作文教材における教材分析と指導方法（書くこと）
- ・教材研究と学習指導案の作成
- ・模擬授業の実践と振り返り

■教育の成果における測定

成果の測定（ディプロマポリシーの到達度）は、授業を行った結果である「学生の事実」を重視する。具体的には、以下の2つで測定する。

- （1）成績評価「秀・優・良・可・不可」の分布
- （2）「授業評価アンケート」
 - ・本学が全学生、全科目対象に実施する「授業をより良くするためのアンケート」ある。
 - ・5段階評価のうち「5：とても当てはまる」「4：まあまあ当てはまる」を回答した学生の割合を数値化し、全体平均（全学部、全授業回答の学生回答率）と比較する。

4. 教育の成果

(1) 成績評価「秀・優・良・可・不可」の分布

秀 31.3 % (5名)、優 62.5 % (10名)、良 6.3 % (1名)、可 0 % (0名) である。

平均 86.1 点は、成績分布から見ても、妥当な範囲であり、下位層が少ない。

到達度から見ても、ボトムアップにつながっている。

(2) 「授業評価アンケート」

※「全体平均」: 全学部、全授業回答の学生回答率をさす

① 「あなた自身の授業態度について」

- ・「1.授業の内容に関心を持ち、積極的に取り組んでいる
(グループワークや課題・ノートをとる・発言する など)」
「5:とても当てはまる」 62 % (全体平均 39 %)
「4:まあまあ当てはまる」まで加えると 100 % (全体平均 76 %)
- ・「2.疑問点などは積極的に質問するように努めている」
「5:とても当てはまる」 23 % (全体平均 26 %)
「4:まあまあ当てはまる」まで加えると 54 % (全体平均 58 %)

全体平均を大幅に上回っている。

積極的に授業に参加し、意欲的に取り組んでいる学生が多い。

しかし、項目2では、課題が見られた。

授業の組み立て方を改善し、アクティブラーニングを重視した授業展開が必要である。

② 「担当教員と授業について」

- ・「1.話し方や説明の仕方がわかりやすい」
「5:とても当てはまる」 92 % (全体平均 39 %)
「4:まあまあ当てはまる」まで加えると 100 % (全体平均 72 %)
- ・「2.授業の目的や進め方が明確である」
「5:とても当てはまる」 85 % (全体平均 40 %)
「4:まあまあ当てはまる」まで加えると 100 % (全体平均 77 %)
- ・「3.学習内容に興味を持てるような工夫がなされている」
「5:とても当てはまる」 92 % (全体平均 36 %)
「4:まあまあ当てはまる」まで加えると 100 % (全体平均 68 %)
- ・「4.学生自身に考えさせる工夫がなされている」
「5:とても当てはまる」 100 % (全体平均 41 %)
「4:まあまあ当てはまる」まで加えると 100 % (全体平均 74 %)
- ・「5.学生の理解を確認しながら授業を進めている」
「5:とても当てはまる」 85 % (全体平均 37 %)
「4:まあまあ当てはまる」まで加えると 100 % (全体平均 71 %)
- ・「6.学生の質問や疑問に適切に答えている」
「5:とても当てはまる」 77 % (全体平均 42 %)

「4:まあまあ当てはまる」まで加えると 92 % (全体平均 74 %)

・「7.成績評価の方法や基準が明らかにされている」

「5:とても当てはまる」85 % (全体平均 40 %)

「4:まあまあ当てはまる」まで加えると 100 % (全体平均 72 %)

全体平均をすべて上回った。[4] まで加えた場合も、同様である。
学生の満足度を保障することができた。

③「学生による到達度評価」

(1)「この授業の到達目標を十分に達成した」に対する回答

「5:とても当てはまる」31 % (全体平均 31 %)

「4:まあまあ当てはまる」まで加えると 100 % (全体平均 69 %)

(2)「この授業に対して、5段階で総合的に評価してください。(5が最も良い評価)」

「5」85 % (全体平均 37 %)

「4」まで加えると 100 % (全体平均 72 %)

(1) (2) については、「5」「4」とも、全体平均を上回り、一定の成果が見られた。
現場に直結する模擬授業を多く取り入れたことが、功を奏したと推測する。
次年度は、小学校へ出向き授業参観を行い、教員に直接指導を仰ぐ機会を設けたい。

(3) 授業改善取組による授業見学

◆実施日：令和6年7月20日(土) 3校目

対象：こども未来学科(教育コース)2年 16名

[1] 授業の主張点

模擬授業を通して、
教材分析、教材提示、発問・指示、板書、ノート指導など、
小学校現場で役立つ効果的な指導方法、指導技術について理解する。

[2] 授業者による振り返り・自己評価

・これまでの授業で、学生は2人組8グループごとに教材研究を行い、教材作成を行い、模擬授業に向け準備を行っている(4年物語教材『ごんぎつね』)。
・『ごんぎつね』(8時間扱い)を第1時目より学生が授業を行っている。前回の授業では、第6時目まで終了している。
・本時(参観授業)は、を行った。
・参観授業は、①学生による模擬授業を2本(第7時目・第8時目)行う、②学生によるグループ討議、質疑応答、③小学校教諭による模擬授業に対する指導・助言、④授業者による模擬授業の評価、代案を示しての解説を行った。学生は、物語教材の効

果的な指導方法、指導技術について学ぶことができた。

・「発問・指示をどのように組み立てるのか」「なぜ板書するのか（しないのか）」児童への意図的指名、ノート指導など、学生の教育行為（アウトプット）をもとに、具体的に考えさせる授業を展開することができた。

・学生の模擬授業に対し、代案を示すことで、授業研究を疑似体験することができた。授業者が何を選択するかによって、児童の「あらわれ」が異なる。理論ではなく、教育場の実情を踏まえながら、学生に体験させることができた。

・児童が身乗り出し話し合わせるには、教師のすぐれた発問・指示が欠かせない。児童のつぶやきを引き出し、アウトプット力を磨く授業をすることができた。

[3] 参観者による感想・助言

・学生の模擬授業のレベルが高い。なかには、小学校現場でそのまま通用するものもあった。学生にどのような指導をこれまでされてきたのか、興味深い。

・教材研究の下調べには、どの程度時間をかけたのか。先行実践をもとに発問・指示の精選、板書計画など、学生同士の打ち合わせにも時間を要するはずである。小学校の若手教員と遜色ない授業準備ができていたのがすばらしい。

・授業をしたどの学生も声のトーンが明るく、にこやかな表情が印象的だった。学生には、授業の中でどの程度模擬授業をされたのか（前に立たせたのか）。教育実習でも十分通用すると思った。

・学生の模擬授業に対し、的確な代案を示されたのが驚いた。「兵十」の視点を「見る」「目につく」「目を落とす」に分け、視点を検討することで、人物の心情が読み取れることが面白い。学生も真剣に考えており、ここから 2 回目の授業がスタートしていた。学生に力の付く解説だった。

・講義形式ではなく、学生自身が主体的に取り組み、グループで協働して意見を交わし、協議する、学生がアウトプットする機会が保障されていた。まさにアクティブラーニングの授業であった。

5. 目標

○学生の「わかる」「できる」を保障する授業の構築に向け、授業のさらなる質的改善をめざす。具体的な教科書教材を用いて、教材分析をさせ模擬授業を多く取り入れることで、学生に授業行為の難しさ、奥深さを体験させる。

○授業力に特化した研修会や授業を相互に参観する機会を増やし、授業の客観性を高める。

○今年度は、小学校教師に授業を録画してもらい、ビデオ視聴による検証、分析を行った。次年度は小学校に出向き、授業参観する演習も取り入れたい。

○小学校現役教師を招き、直接指導を仰ぐ機会を多く取り入れたい。

○本授業を他の教科教育の授業や現役教員を招いた学習会「教師塾」（時間外）と関連させ、現場で即戦力となる学生の養成に力を注ぎ、「短大と現場を繋ぐ」必要がある。